

# 高校生の意識実態と解放教育の課題

——一九八二年度大阪府立高校一年生部落問題意識実態調査の分析——

## 研究所高校奨学生部会

### 一、はじめに

部落解放研究所高校奨学生部会（一九八一年までは中学校部会と称す）は、大阪府立高等学校同和教育研究会（以下、府高同研）事務局の協力を得て、府立高校一年生についての部落問題意識調査を行なった。今回の調査は、一九八〇年、八一年と府高同研が実施した「高校生の部落問題に関する意識調査」を踏襲し、補完するもので、調査項目も昨年の府高同研の実施した調査と同一のものである。

調査は、一九八二年六月に、大阪府下の一九の府立高校

から、それぞれ新一年生の一〜三学級を抽出して調査し、その標本回答（一、四二二名）をコンピューター処理した。なお調査標本の分布が府立高校全体の分布を反映したものにするため、実業課程や定時制課程の高校もその中に組み入れている。

このような高校生を対象とする部落問題に関する意識実態の調査は、従来は主に学校単位で行われて来ており、それぞれの学校に於ける部落解放の教育の課題を発見したり、方策を策定するのに役立って来た。自校の解放教育推進のための第一着手として、まず、アンケートを実施するという手順は、かなりひろく用いられている。

それぞれの学校で、生徒を身近かに知る教師が、その生

徒に即してアンケートを立案実施するのもその主体性、独自性のもつ意義は深いのであるが、各校の調査様式等の間に統一性が保たれなかつたため、結果の分析・課題の検索等にも限界がある。府高同研がこの調査を企画した理由の第一は、各高校現場が同和教育の自校の課題を検出しやすくするために比較のできる一般的な基準を提示する事であり、いうなれば、各高校現場が自分の学校の生徒の意識実態を、府下の高校生全般の意識状況との比較において把握し、高校における同和教育推進上の問題点を明らかにし、対策を練る手がかりを求めめるためのものである。このように一つの府県域体の高校の部落問題意識実態調査が三年間にもわたって継続的に行なわれたのは、他に例のない事であるので、比較の基準は府下の高校に対してだけに限らず、他府県の部落解放教育研究のためにも役立つと思われる。

部落に関する正しい認識の獲得ということと差別を許さず、差別に対して怒りをもつ感性を養うことをいかに統一的にとりくむかという視点に立って、アンケートという調査方法のもつ限界を感じながら、①部落の起源について正しい認識はいかにして獲得されるか、②「何とかしなればと思う」あるいは「部落問題をよく学習して将来はこの問題にとりくみたい」と感じる生徒を育てるアプロー

チの方法は何か、③その他、同和教育をめぐる諸問題の解明、の以上の点を今回の調査分析の目標として設定した。

### 二、第一次集計（単純集計）の結果

八二年調査の集計は、まず各調査項目毎の第一次集計を求め、過去二回の調査データとの比較を試みた。（文末資料を参照）前回の調査の分析は紀要『部落解放研究』二四号、二九号に詳しく論じられているが、今回の調査結果でも前回と同様の結果を示しているものが多く、調査の安定性を示している。以下主な項目についてのみ報告する。

#### 部落の初期認識について

⑦はじめに「部落」を知った時期（質問1）

96%（80年98%、81年97%）の生徒が高校入学前に知っており、大半は「小学校高学年の頃」と答えている。

（82年42%、81年46%、80年48%）

④部落の存在をだれから知ったかという情報源（質問2）

部落の存在をはじめて知ったのは「先生」からと答えた生徒が、54%（80年55%、81年57%）であり、成人の意識

調査で高い比率を示す「父、母、その他の家族」は8%（80年13%、81年8%）であり、大きなちがいを見せている。小、中学校での解放教育の量的広がりを実証している。

⑦その時の印象（初期印象）（質問3）

初期印象は、80年のデータと81年・82年のデータに差がある。82年・81年では「よくわからなかった」がトップ（82年43%・81年40%）で、続いて「気の毒だと思った」（82年26%・81年27%）。「腹が立った」・「自分の関係がない」と続くが、81年調査結果では、①「気の毒だと思った」（36%）・②「自分には関係ないと思った」（20%）・③「ショックを受けた」（17%）の順となっている。

これは、5年以上も前の初期印象を聞いているため、おぼろげな記憶にたよらざるをえない面もあり、これらを考え合わせると、設問の是非も再検討する必要がある。

部落問題の知識量と同和教育学習について

⑧部落の起源についての知識（質問5）

政治的起源説（封建時に幕府代や藩が民衆を支配するつ

識量は少ない。

⑨同和教育の学習量（質問7）、解放教育読本「にんげん」の使用状況。

中学校で部落差別などの人権問題に関する学習（授業）は、学期に1、2回（年三〜五回）と答えたものが半数を占め（82年46%・81年47%）、月一回以上が $\frac{1}{4}$ （82年32%・81年33%）である。一方、ぜんぜん習わなかったと答えた生徒は、82年20%、81年19%となっている。

又、一九七〇年より大阪府下一斉に小・中学校で無償配布されている解放教育読本「にんげん」の使用状況では、「一、二回使った」と答えたものが一番多く（82年44%・81年46%）、「よく使った」と回答したものは $\frac{1}{4}$ 程度（82年25%・81年23%）にとどまり、「配られただけ」、「そんな本は知らない」の合計（82年29%・81年31%）を下げた。

同和教育の学習量と部落問題、人権問題に関する知識量には相関関係があり、同和教育の量の増大によって知識も増すということはいえるが、「破戒」などの文芸作品では必ずしもこのことが明らかでない。

⑩中学校での人権問題全般の学習量（質問9）

どうで作った）を正しいと答えた生徒が55%（81年64%・80年57%）、その他の起源説が45%（81年36%、80年43%）となっている。中でも職業起源説（みんなのいやがる仕事をさせられていた人達が集まって住むようになった）を正しいとするものが24%（81年20%・80月15%）、渡来人起源説（昔、外国からわが国へやってきた人達の子孫）のものが7%（81年7%・80年16%）と高率を占めている。

このように高校生の正答率は、成人の2倍まで向上している事が明らかになったが、これは何よりも小・中学校の同和教育の成果であるが、一方ではその効果がこの程度にしか達していないのかという見方もできる。

試算の過程で明らかになった事だが、この部落起源についての正答率には、いわゆる「学校差」との相関があり、部落の初期情報を教師から得た率の高低に対しては相関がない。部落問題の知識を確実に教えるにも、それを受ける生徒に確かな学力が必要であることを示している。

⑪部落問題に関する知識（質問6）

歴史に関する知識（洪染一揆、解放令、全国水平社）と狭山事件については、知っている生徒が多い。又、文芸作品では、「破戒」を知っている率も高い。一方、同対審査申や松本治一郎など戦後の部落解放運動や現代に関わる知

「原爆・平和」、「憲法と基本的人権」のテーマは当然のこととして高い比率を示しているが、これらを「学習した」と答えたのは、全体の六割程度にとどまっている。

部落問題や他の差別問題については、生徒間に高校入学前の学習歴に大きな差があることが明らかになっている。特に、部落を校区に含む学校と含まない学校では、差別問題についての学習量の差が大きいことがこれまでからも指摘されているが、調査結果も同様の事実を示している。

⑫生徒たちの同和教育についての意見（質問10・11）

小・中学校でうけた同和教育に対する肯定的感想（もっと学びたかった」と「授業をうけてよかった」）が35%（81年33%）、否定的感想（「反感をもった」と「やりすぎと思った」）は14%（81年19%）、「むずかしくてよくわからない」や「自分には関係ない」とした回答が39%（81年37%）となっている。

次に高校の「同和教育」についての要望では、「もっと理論的にくわしく学びたい」が35%（81年35%）でトップで、その中でも「部落の今の実態」について学びたいとの希望が強い。次に「部落問題以外の人権問題に力を入れてほしい」が30%（81年29%）、「進学や就職の方が大切だから教科の学習に力を入れてほしい」や「いっさいやってほ

しくない」という反発型が26%(81年26%)となっている。

### 部落解放の展望と自分自身の関わりについて

部落差別問題と自己との関わりを聞いた質問12への回答は、「わからない」32%(81年36%)、「差別をなくす方に力を入れる」30%(81年25%)、「部落出身者でないことをわかってもらう」21%(81年22%)、「別の土地へ行くなどとする」5%(81年3%)である。

又、部落解放の展望(質問13)については、差別反対の関い43%(81年40%・80年28%)、環境改善28%(81年29%・80年27%)、学校教育30%(81年27%・80年20%)、大人たちの再教育21%(81年28%・80年43%)が高率を示し、「そっとしておけば自然になくなる」・「部落分散論」があわせて31%(81年30%・80年31%)、「何をやっても無駄」・「部落の人がまわりからきらわれないように気をつければよい」という否定的意見が15%(81年16%・80年21%)となっている。

部落の起源の正答率の高さにみられるように、部落問題、人権問題の知識が豊富になり「差別はいけない」というタテマエは浸透したが、自分自身の課題にするという「ホッネ」にまではいたっていない現状がうかがい知れる。

と差別に直面した時の態度(質問12)のクロス集計を行なった。  
次に、アンケート調査項目の特定の選択技に対して同一

の回答をした者について、他の質問に対してはどんな応答をするかを・調べたクロス集計の結果をみてる。(質問項目は文末資料を参照のこと)

### 部落の起源の正答に関して

(ア)、部落について生徒たちに最初に教えた「情報源」の種類によって、知識の正確さに差があるかどうか(質問②と⑤のクロス)

表1は、誰が最初に部落について教えたかによって、部落の起源についての生徒の理解に差があるかどうかを調べたものである。表の中の「私人」とは、情報源が、父、母、その他の家族、近所の人、友人である者をまとめたものである。

(表1)

部落の起源	情報源	
	私人	先生
職業起源説	28	24
政治起源説	44	62
渡来人起源説	11	5
落武者起源説	10	5
宗教起源説	5	3

私的情報源(私人)からは、部落の起源について正

なお、質問13に対する回答は、大阪市の成人意識調査の結果と比べて、大きな差異を示している。(文末資料参照)  
部落問題以外の差別問題に関しては、障害者問題、在日朝鮮人問題、民族問題につき学歴による差別が上位にきているのが目につく。進学受験競争の中であえぐ生徒たちの姿の一面を示すものといえよう。

### 三、第二次集計(クロス集計)で明らかになったこと

昨年の調査分析では、部落の初期認識をめぐる諸問題(質問1・2・3・4のクロス)、同和教育量をめぐる諸問題(質問5・6・7・8・9・10・11のクロス)、部落の現在認識と部落解放の展望(質問4と12・13のクロス)について詳細な分析を行なった。

従って本年度の第二次集計と分析では、これらの成果をふまえ、昨年できなかった項目のクロス集計を重視し、部落の起源(質問5)と情報源(質問2)・初期印象(質問3)、次に部落の現在認識(質問4)と情報源(質問2)・初期印象(質問3)・部落の起源の回答(質問5)・同和教育量(質問6・8・9)、さらには、同和教育量(質問7)と学校への要望(質問11)のクロス、知識量(質問6)

しく理解している者(政治起源説)は、44%で半数にも達していない。それに対して、学校の先生から学んだ生徒は62%が正しく理解している。

学校教育で知らされた者のうち38%の生徒が正しく理解していないという問題は残るにしても、表1は、学校での同和教育の必要性、有効性を示している。

(イ)、解放教育読本「にんげん」の使用量との相関について(質問⑤と⑥のクロス)

次に、読本「にんげん」の使用量との相関を見て見よう。図1で用いている「にんげん」の使用量の数字は、質問⑥に対する回答の番号である。

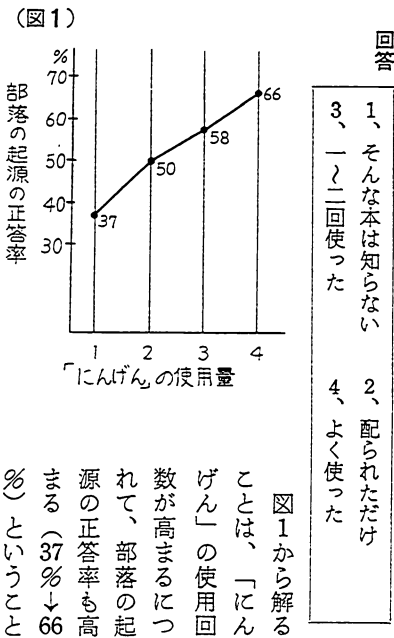


図1から解ること、  
「にんげん」の使用回数が高まるにつれて、部落の起源の正答率も高まる(37%→66%)ということ

- 1、そんな本は知らない
- 2、配られただけ
- 3、一〜二回使った
- 4、よく使った

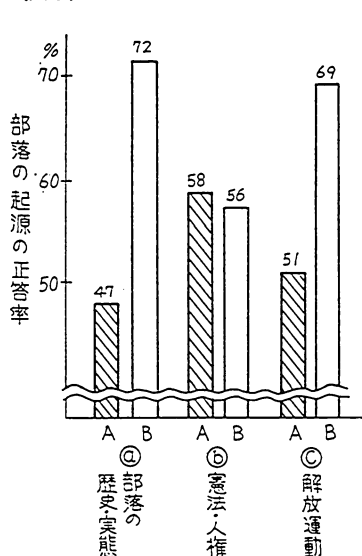
(表3)

質問	回答	%
右のことがらやうち、中学校で学習したものがあつたら、○で囲みなさい。	1. 部落実態・歴史	39
	2. 原爆・平和	63
	3. 憲法と基本的人権	52
	4. 部落解放運動の成果	30
	5. 狭山事件	22
	6. 在日朝鮮人問題	34
	7. 障害者差別	50
	8. 国際人権規約	10
	9. 地元集中受験	13

(E)、学習項目との関連性(質問④と⑥のクロス)  
 表3は、質問⑥への回答であるが、その中から、(a)部落の実態・歴史、(b)憲法・人権、(c)解放運動をとりだし、それぞれの項目について、先程と同じように、A(習っていない者) B(習っている者)の間に、部落の起源正答率について、どのような差異があるかを調べた。その結果を表わしたものが図3である。

者( )の中の正答率は、A(習っていない者) (c)解放運動で

(図3)



は51%で、他方、B(習っている者)のそれは69%である。BとAの差をそれぞれについて見ると、(a)部落の歴史・実態と(c)解放運動については、その差はかなり大きい。(b)憲法・人権については、有意差はないと言える。予想できた結果であるが、部落問題の正しい知識を得るためには、憲法や人権の一般論を学ぶだけでは不十分であり、具体的に、部落の実態・歴史や解放運動をも学ぶことが大切なのである。それは前述の質問⑥に対する回答からも明らかである。

部落問題についての現在の感想

部落問題についての現在の感想(質問④)についての調

である。部落問題の正しい理解を得るための教材として、読本「にんげん」を活用した実践の重要性がアンケートの分析からも確認されたと言える。

(ウ)、知識項目との関係について(質問⑥と⑦のクロス)

(表2)

質問	回答	%
右のことがらや人物について知っているものがあつたら○で囲みなさい。	1. 破戒	23
	2. 橋のない川	10
	3. 洗染一揆	30
	4. 解放令	44
	5. 全国水平社	40
	6. 西光万吉	3
	7. 松本治一郎	1
	8. 同対答答申	2
	9. 狭山事件	39
10. 地名総鑑	14	

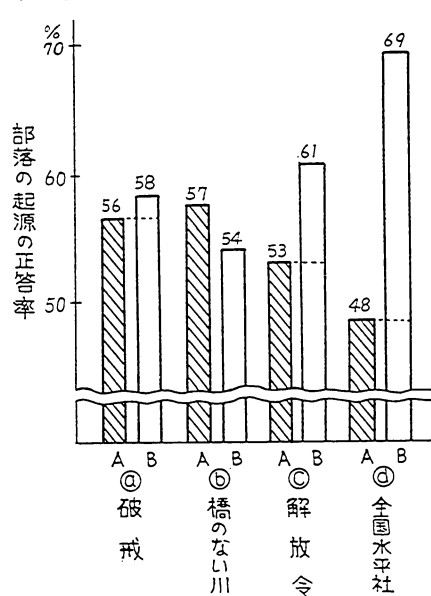
表2は質問⑥

への回答の状況であるが、次に(a)破戒、(b)橋のない川、(c)解放令、(d)全国水平社の各項目ごとについて、A(知らない者) B(知っている者)

の間に、部落の起源の正答率の違いがあるかどうかを調べてみた。それが図2である。全国水平社については、A(知らない者)は60%であり、B(知っている者)は40%である。西光万吉や松本治一郎などは、知っている者が少数なので、偶然の誤差の影響が大きくなるので、このような手法は採用できない。

図2では、BとAの差に注目して欲しい。例えば、(d)全

(図2)



「破戒」や「橋のない川」が文学作品及びその映画化であり、解放令や全国水平社が歴史的事実である違いはあるにせよ、この「BとAの差」の違いは、無視できない。

高校の同和教育ホームルームの時間は限られている。その限られた時間の中で教えることのできることも当然限られてくる。図2が示していることを、題材を選ぶ際のひと

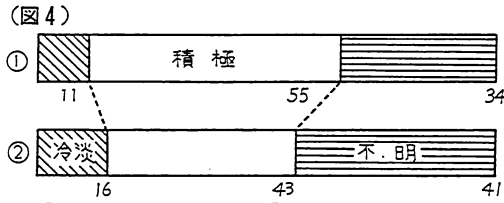
(表4)

質問	回答	%	型	%
④今ではどう思っていますか	1.自分には関係ないことだと思う	5	冷淡	14
	2.気の毒だがし方がないと思う	9		
	3.何とかしなければと思う	46	積極	49
	4.よく学習して将来は取りくみたい	3		
	5.まだよくわからない	31	不明	37
	6.その他	6		

査結果は、表4の通りである。「まだよくわからない」と回答した者が全体の31%もいた。

この後の分析のために、回答を三通りの型にまとめて、それぞれ、冷淡型、積極型、不明型と呼ぶことにする。すると積極型は全体の49%、不明型37%、冷淡型14%となる。

解放教育にとって望ましいのは、積極型であり、積極型の全体に占める割合を高めることである。どのようにすれば



①は政治起源説の者 ②は他の起源説の者  
 ① このことは、「差別に直面した時の態度」と「部落問題に対する現在の感想」との差、すなわち、クロス集計におけるもう一方の質問項目の差によるものと思われる。  
 ② このことは、「差別に直面した時の態度」と「部落問題に対する現在の感想」との差、すなわち、クロス集計におけるもう一方の質問項目の差によるものと思われる。

の感想」との差、すなわち、クロス集計におけるもう一方の質問項目の差によるものと思われる。

(ウ)、同和教育「量」との関係(質問④と⑦のクロス)

部落問題についての現在の感想が、同和教育の時間の長短とどのような関係があるのかをここで調査・分析しよう。

「同和教育やりすぎ論」が一部にあるので、このことに

ば積極型を増すことができるかを、次に分析してみたい。

(ア)、生徒達が最初に知ったときの「情報源」によって、どんな差があるか(質問②と④のクロス)

(表5)

情報源	型	
	冷淡	積極
今ではどう思っているか	18	44
	10	38

表5の通り「私人」すなわち私的情報源からでは、積極型は44%に過ぎない。それに対して、先生から初めて知った者の中では55%と半数を上まわっている。冷淡型も私的情報源が高率であるが、不明型では両者の差はない。

育の大切さが明らかになっている。

(イ)、部落の起源に対する正しい知識との関連(質問④と⑥のクロス)

ここでは、正しい知識と現在の感想との関連を図4で見

てみよう。政治起源説の者の中では、冷淡型は11%、積極型は55%、不明型は34%である。他方、それ以外の起源説の者の間では、冷淡型、不明型はそれぞれ16%、41%と増えており、

関心がある人は多いように思う。

(表6)

質問	回答	%
中学時代の3年間平均してどれ位習ったか	1.ぜんぜん習わなかった	20
	2.年に3~5回習った	46
	3.1ヶ月に1回ぐらい	16
	4.週に1回あるいはそれ以上	16

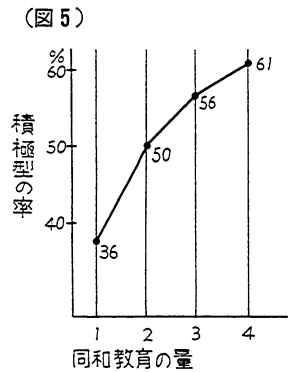
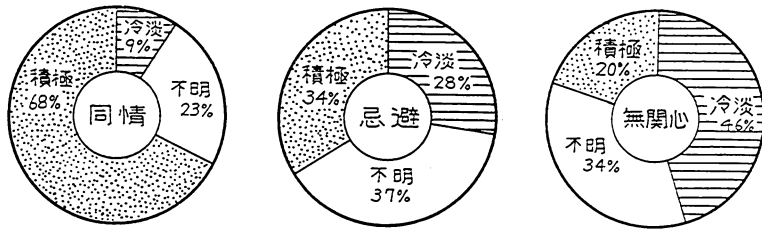


図5で用いている同和教育の量の数字は、表6の回答の欄の番号である。図5から明らかのように、学校における同和教育の量が増えるに伴って、積極型の占める割合も大き

くなっている。ぜんぜん習わなかった者の間では、積極型は36%であるのに、週に一回かそれ以上の生徒群では、61%にもなっている。「また同和教育か」という生徒の反感は、昨年の分析にもあるように、「やりすぎ」という量の問題ではなく、その内容に深くかかわる質の問題であり、授業内容がよければ量がふえるほど効果があがっているのである。

(図7)



同情的な初期印象をもっていた生徒の現在の感想

同情的な初期印象をもっていた生徒の現在の感想

忌避型の初期印象をもっていた生徒の現在の感想

忌避型の初期印象をもっていた生徒の現在の感想

無関心型の初期印象だった生徒の現在の感想

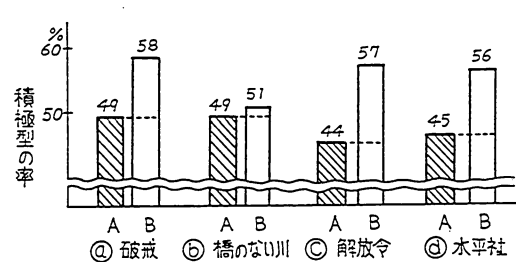
無関心型の初期印象だった生徒の現在の感想

図7の通り同情型の初期印象をもっている生徒の中

では、積極型は68%と高率である。部落はこわい所との初期印象をもっていた生徒の間では34%で、無関心型では20%しかない。それぞれもとも多数を占める類型は、同情型→積極型、忌避型→不明型、無関心型→冷淡型である。初期印象の類型が変われば、現在の感想の類型も変わっているということは、初期における印象を我々は非常に重要視しなければならぬことを意味している。

(E) 知識項目との関係について(質問④と⑥のクロス)

(図6)



部落問題の現在の感想と知識項目との関係を調べると、図6の通り、部落の起源の正しさと知識項目の関係を調べた時と同様に、表2の中から(a)、破戒、(b)、橋のない川、(c)、解放令、(d)、全国水平社をとりだすことにする。Aは知らない者の全体であり、Bは知っている者のグループである。橋のない川を、知らない者(A)の間では、積極型の率は49%であり、B(知っている者)の中では、51%と差異はない。他の項目については、9%~13%の差異があり、B(知っている者)の「感想」の方がより好ましい。この知識項目間の差は、教材のもつ性格によるとも言えるかもしれないが、それよりも教材を教える教師集団の熱意や気迫が大きく作用していると思われる。むしろその教材を教える教師集団の情熱と決意の差がここに表われている。

(F) 初期印象との相関(質問③と④のクロス)

(表7)

質問	回答	%	型	%
③ その時あなたは どう思いましたか	1. 気の毒だと思った	26	同情	42
	2. ショックをうけた	5		
	3. 腹が立った	11	忌避	6
	4. こわいところだと思った	6		
	5. 自分には関係ないと思った	6	無関心	9
	6. しかたがないと思った	3		
	7. よくわからなかった	43	その他	43

初めて、被差別地区のことを知った時に受けた印象について調べたものが表7である。考察の都合上、回答を同情型・忌避型・無関心型・その他に分類しこの初期印象との現在の考え方の相関性を調べた。初期印象の類型分けと現在の考え方や感想の類型分けとは、似たような類型があり(回答項目についても然り)、生徒の中には、当時の印象と現在の考え方を混同している者もいるかもしれない。しかし、その危険性、アンケートの限界を感じながらも調べてみる。

その他のクロス集計について

(F) 同和教育量と学校への要望との関係(質問⑧と⑩のクロス)

(表8)

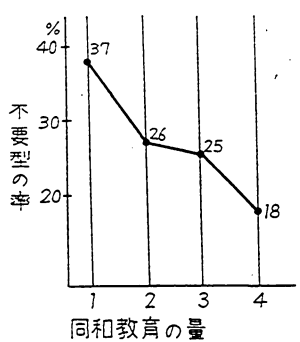
質問	回答	%	型
⑩ これまでの学習の体験から高校の同和教育について何を希望しますか	1. もっと理論的にくわしく学びたい	35	必要
	2. 部落問題以外の人権問題にも力を入れて欲しい	30	不要
	3. 教科の学習に力を入れて欲しい	12	不要
	4. いっさいやっけて欲しい	14	必要

同和教育をやりすぎるから、生徒は同和教育がいやになるのだとの意見が一部にあるが、それは本当に生徒の意見を反映したものであろうか。このことを調

べてみる。表8の回答番号の3(教科第一)と4(一切不要)を合せて、「不要」という類型をつくる。不要型の全体に占める割合は26%である。図8で用いている同和教育の量の番号は、質問⑧の回答の番号である。

この図8を見ると、不要型は、1の「ぜんぜん習わなかつた」場合にも

(図8)



3の「一カ月に一回ぐらい」では、約25%、4の「週一回かそれ以上」の場合では18%にまで減っている。このことは、生徒が同和教育に対して必要と感ずる必要と感ずるかは、同和教育を実践する教師と教師集団の姿勢によるということを示している。

「年3~5回習った」場合と教育の量に反比例して、2の%を占めてい

(表9)

質問	回	答	%
⑫もしあなたが部落の人だと思われたら、知られたりしたらどうしますか	1.	別の土地へ行くなどする。	5
	2.	部落出身者でないことをわかってもらう。	21
	3.	差別がいけないことを入れ替えてみる。	30
	4.	わからない。	32

要と感ずるかは、同和教育を実践する教師と教師集団の姿勢によるということを示している。

(表10)

		a 破戒		b 橋のな川		c 解放令		d 水平社	
		A	B	A	B	A	B	A	B
思われたら	1.別の土地に行く	4	7	5	6	6	3	5	4
	2.否定	25	21	25	18	27	21	25	23
	3.解放	31	45	34	32	25	45	29	41
	4.わからない	38	27	34	43	39	31	38	31

(イ)、知識項目と「差別に直面した時の態度」との相関(質問⑩と⑫のクロス)ここでは、前述と知識項目と自分が部落の人思われた時にとる態度との相関を調べた。まず、差別に直面した時の態度(質問⑫)の回答は表9の通りである。そして、知識項目(質問⑩)との相関関係を求めたのが表10である。表10で気になることは、(a) 破戒と「別の土地に行く」と関係である。質問に対して、別の土地に行くに答えた者の割合がA(知らない者)の中では4%、B(知っている者)の間では7%と微かだが増えている。「破戒」という文学作品のもつ性格によると考えられなくもない。「解放」との関係で「BとAの差」を考え、(a) 破戒、(c) 解放令、(d) 水平社については、

それぞれ12%~20%上昇し、B(知っている者)の方が積極的な意見が多くなっている。(b) 橋のない川では、有意差はみられない。

おわりに

今回の調査では、各学校現場をはじめ、多数の方々に協力を頂いた。ここに感謝し、本報告を終る。(文責関友行)

(注)①、この意識調査の調査票の様式は、一九七九年に大阪府が市民(成人)対象に実施した「大阪府民の同社問題に関する意識調査」をベースに、大阪府下の公立高校、私立高校で実施されている同種の意識調査アンケート用紙を参考に作成されたものである。一九八〇年度調査票と八一年、八二年度分には一部変更が加えられている。

②、一部に「人間の感性を数量化できるのか」などの疑問もあるが、数量化の精度に限界があることは当然ながら、かなりの程度実態が明らかにでき客観化できるのも又、周知の事実である。試算の段階では学力の高い生徒群とそうでない生徒群との間、あるいは同和教育の活発な市の生徒群とそうでない生徒群との間には、それぞれ大きな偏差があるし、学校によって調査参加学級数が異なるので、単なる平均では全体を代表する数値にはならない。しかし調査参加校の分布が全体に対してシミュレートされている(普通科校が全学区に及びいわゆる学校格差毎の校数対応がよく、職業科校が全職種に及び全・定・隔定の校数対応がよい)ので学校毎に一旦百分率化して標本数比重を

均等にしたもの平均値は、学力の偏差に関する標準性があるかと仮定できる。一方調査生徒の住所が府下全市町に亘っているので住所ブロック別百分率の平均値は地域偏差に関する標準性があると考えられるのでその両者を算出し比較した所、各項目の%値に対して7%の範囲で一致した。つまりこのクロスチェックにより、前記の標準性の仮定は実証できたと考えてよい。そこでこれを全府高標準値とした。

③、高校生の部落問題に関する意識調査は、各高校現場ではさまざまな方法でやられているが、いくつかの高校に共通したアンケート調査の実施というやり方はあまり類がない。最近では、滋賀県や三重県の高校で意識調査の試みがあるが、「同和教育運動」第19・20号で紹介されている、いずれも各質問項目の単純集計にもとづく分析、批評にとどまり、十分な科学的根拠にもとづいていない。

④、ここで注意しなければならないのは、クロス集計を行う際に、或る一つの質問について同一の回答をした者の数が少ない項目の処理についてである。このままでは、誤差が大きくて正確になし捨てると、その項目を回答した者の意思を無視することになる。そこで、内容の近似する項目を一つのグループにまとめて考え、例えば、「近所の人」と回答した者が少ない場合は、「近所の人」「友人」「父」「母」「その他の家族」をひとつにくくって、「私的情報源」あるいは「私人」とした。

No.	質問項目	回	答	府立高校1年生の意識調査			1979年 大阪市 成人意 識調査
				1980年 調査	1981年 調査	1982年 調査	
6	右のことがらや人物について、あらましを知っているものがあたら、回答らの番号を○でかこみなさい。	1. 破戒 2. 橋のない川 3. 洗染一揆 4. 解放令 5. 全国水平社 6. 西光万吉 7. 松本治一郎 8. 同対審答申 9. 狭山事件 10. 地名総鑑	21	26	23		
			11	9	10		
			25	33	30		
			34	44	44		
			32	32	40		
			3	3	3		
			—	1	1		
			3	4	2		
			47	52	39		
			13	18	14		
7	部落差別など人権のことについては中学時代の3年間平均してどれくらい習いましたか。	1. ぜんぜん習わなかった 2. 年に3～5回習った 3. 1ヶ月に1回くらい 4. 4週に1回くらい 5. 週に何回もあった		19	20		
				47	46		
				15	16		
				15	13		
				3	3		
8	副読本「にんげん」はどのように使いましたか。	1. そんな本は知らない 2. 配られただけ 3. 1～2回使った 4. よく使った		3	3		
				28	26		
				46	44		
				23	25		
9	右のことがらのうち、中学校で学習したものがあたら、回答らの番号を○でかこみなさい。	1. 部落の実態・歴史 2. 原爆・平和 3. 憲法と基本的人権 4. 部落解放運動の成果 5. 狭山事件 9. 在日朝鮮人問題 7. 障害者差別 8. 国際人権規約 9. 地元集中受験		45	39		
				65	63		
				59	52		
				29	30		
				27	22		
				38	34		
				45	50		
				9	10		
				17	13		
10	小学校・中学校時代に受けた差別・人権の学習について、いま、あなたはどんな感想をもっていますか。	1. もっと学びたかった 2. 授業をうけてよかった 3. 大切なことだと思ったが、むづかしくてよくわからなかつた 4. 自分にはあまり関係のないことだと思った 5. たてまえばかりなので反感をもった 6. やりすぎだと思った 7. その他	9	7	7		
			30	26	28		
			—	31	33		
			4	6	6		
			44	15	10		
			5	4	4		
			7	10	10		

## 高校生部落問題意識調査の年次比較

No.	質問項目	回	答	府立高校1年生の意識調査			1979年 大阪市 成人意 識調査
				1980年 調査	1981年 調査	1982年 調査	
1	「部落」とか「同和地区」とかの名でよばれ、差別されている地区があることを、あなたが初めて知ったのはいつごろですか。	1. 小学校入学前 2. 小学校低学年 3. 小学校高学年 4. 中学時代 5. 中学卒業後 6. いつだかおぼえていない 7. まだよく知らない	2	1	2	4	
			19	17	15	}32	
			48	46	42		
			21	22	23	22	
			1	1	1	12	
			7	11	12	8	
			2	3	4		
2	初めてその事を知ったのは、だれ(何)からですか。	1. 父 2. 母 3. その他の家族 4. 近所の人 5. 友人 6. 先生 7. テレビ 8. 本 9. 府や市の広報紙 10. だれからともなく	4	2	2	}29	
			7	5	5		
			2	1	1		
			1	0	0	6	
			9	5	6	14	
			55	57	54	9	
			5	3	4	}8	
			9	8	7		
			2	0	0	}3	
			8	16	17		
3	その時あなたはどのように思いましたか。	1. 気の毒だと思った 2. ショックをうけた 3. 腹が立った 4. こわいところだと思った 5. 自分には関係ないと思った 6. しかたがないと思った 7. よくわからなかつた	36	27	26		
			17	6	5		
			7	13	11		
			6	5	6		
			20	7	6		
			3	2	3		
			9	40	43		
4	今ではどう思っていますか。	1. 自分には関係ないことだと思う 2. 気の毒だがしかたがないと思う 3. 何とかしなければと思う 4. よく学習して将来はこの問題にとりくみたい 5. まだよくわからない 6. その他		4	5		
				8	9		
				48	46		
				3	3		
				29	31		
				7	6		
5	部落ができた理由については、さまざまな説がありますが、あなたが正しいと思うもの、または近いと思うものを右の中から1つえらびなさい	1. みんなのいやがる仕事をさせられていた人達が集って住むようになった 2. 封建時代に幕府や藩が民衆を支配するついでで作った 3. 昔、外国からわが国へやって来た人達の子孫によってできた 4. 昔の戦争で負けて逃げのびた人達が集って住むようになった 5. 宗教的な考えにもとづく 6. その他	15	20	24	38	
			57	64	55	28	
			16	7	7	10	
			4	4	7	9	
			1	4	4	3	
			(5)			(1)	



No.	質問項目	回答	府立高校1年生の意識調査		1979年大阪市成人意識調査	
			1980年調査	1981年調査	1982年調査	調査
11	これまでの学習の体験から考えて、あなたは高校の同和教育について何を希望しますか。(1)をえらんだ人はA・B・Cもえらんでください。	1. もっと理論的にくわしく学びたい A. 部落の歴史 B. 部落の今の実態 C. 部落解放運動について知りたい 2. 部落問題以外の人権問題に力を入れてほしい 3. 進学や就職の方が大切だから教科の学習に力を入れてほしい 4. っさいやってほしくない	35	35	{ A 6 B 22 C 7	{ A 8 B 31 C 7
12	もしもあなたが部落の人だと思われたり、知られたりしたらどうしますか。	1. 別の土地へ行くなどする 2. 部落出身者でないことをわかってもらう 3. 差別がいけないことなのだから差別をなくす方に力を入れる 4. わからない	3 22 25 36	5 21 30 32		
13	どうしたら部落差別をなくすことができますか。右の中から有効だと思うものを2つあげなさい。	1. 学校の同和教育・解放教育をしっかりやっていく 2. 部落の環境を改善し生活水準を上げればよい 3. 部落の人がまわりからきらわれないように気をつければよい 4. 差別を受けている人達为中心となって差別にたちむかい、自分たちも行動を共にする。 5. そっとしておけば差別は自然になくなる 6. 差別をする人達を法律でとりしまってあげればよい 7. 分散して、どこが部落だかわからないようにすればよい 8. 私達若い者には差別意識などないから成人向けの同和教育に力を入れる 9. 何をやってもむだなことだと思う (その他)	20 27 9 28 11 12 20 43 12	27 29 7 40 9 16 21 28 9	30 28 7 43 10 18 18 21 8	22 20 22 29
14	部落差別のほかにも差別があります。あなたがとくに重要だと思うものを2つあげなさい。	1. 女性差別 2. 障害者差別 3. 被爆者に対する差別 4. 在日朝鮮人差別 5. 沖縄差別 6. アイヌ差別 7. 人種・民族差別 8. 学歴による差別 9. 職業による差別	11 60 — 42 4 — 43 — 33	11 57 6 26 1 1 24 46 20	10 59 6 21 2 1 14 30 8	(10)

(注) 1. 「1980年度調査」は、質問項目が一部ちがっているため、質問(4)、(7)、(8)、(9)、(11)、(12)は比較できないので、空白としました。  
 2. 「1979年大阪市成人意識調査」も質問項目が異なるため、比較できる項目だけを記述した。